ものなりとす、然るに回鶻が唐の武宗の時代に當り、内亂と外寇との爲に其の故土を棄てゝ潰散し、後其の一部が懿宗の成通七年（八六八年）西州卽ち高昌を取りて其の地に據りしより後は、何時よりの事なるかは明らかに定め難きも、彼等が回鶻文字を使用し、之によりて諸種の文記を作成せしことは明らかにして疑ふ可らざる所なり、茲に於てか自然に導かるべき結論は、回鶻人が所謂回鶻文字を使用するに至りしは、其の高昌地方に移りしより後の時代、卽ち九世紀の後半以後の事にして、漠北時代に於ては、從來此の地方に行はれたる突厥文字を用ゐたるに外ならざるべきこと之なり、勿論此の如きは現今に存せる僅少なる資料の上に立ちて試みたる推定に過ぎざれども、然も從來知られたる如何なる資料も、彼等が漠北時代に於て既に此の文字を使用したるべき推察をすら試ましむるに足るべき材料を供給せざる以上、又後に回鶻の摩尼教徒が使用したる此の文字が、尙漠北時代の其の教徒の墓誌には用ゐられざる以上は、更に新しき資料の發見せられて此の問題に解決を與ふるに至る迄は、如上の推定は決して動かす可らざるものと云はざる可らず。

只だ茲に一個の注意を怠る可らざる事實は、余が近く見るを得て（本書上卷三七四頁及三七八―九頁）に載せたる回鶻の貨幣なり、此の貨幣は余の知れる限に於ては、從來嘗て學界に紹介せられたること無きものにして、次に拓出せるが如く